生き生きとした自分を見つめるための実用生活誌

はじまりのページ

Shukokai-Magazine The page of beginning

2025 Winter & Spring NO.67

ダイジェスト版

新春特集

蓮見グループの
“キーパーソン”が語る

がん治療の未来

Special

北京で開催された「国際医療観光展示会」に
蓮見グループがブースを出展

～ 大反響を呼んだ3日間 ～

Series Essay
思いの言の葉 Vol.61

再生の年

蓮見賢一郎 医療法人社団 珠光会 理事長

向春とはいえまだ寒さが続く頃、みなさまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

今年の干支は乙巳（きのとみ）――。乙は陰陽五行説では、植物が成長して繁殖していくという意味を持ち、巳はご存じの通り十二支の六番目で〝ヘビ〟を表しています。

ヘビは、古来より豊穣神や天候神として多くの人たちに崇められてきました。

脱皮するヘビに〝復活や再生〟をイメージした人々は、不老長寿や強い生命力のシンボルとして、ヘビをとても縁起の良い動物だと考えてきたのでしょう。全国にはヘビを祀った神社も多数あり、七福神の一柱である財福・芸能・知恵の女神〝弁財天〟の使いは白蛇だそうです。

ヘビに象徴化される〝復活や再生〟のエピソードは、日本のみならずキリスト教の理念やギリシャ神話、エジプト神話など、世界中の物語のなかに散見されます。ことほどさように復活・再生は旧来から人類の憧憬（どうけい）であり、あくなき知識の探求対象だったわけです。

そして、現在――。〝再生〟は現代科学の力によって現実のものとなりました。２００６年に京都大学の山中伸弥教授らが作成したｉＰＳ細胞（あらゆる生体組織に成長できる万能な細胞）を皮切りに、細胞や組織を再生することで怪我・病気で損なわれた機能を復元する〝再生医療〟が飛躍的に進歩したのです。さらに、フレッシュな培養細胞による肌老化の改善など、美容医学への応用も進展し、今や再生医療はアンチエイジングを実現させ、若々しく活動的な社会を醸成させるための重要な要素となっているのです。

蓮見グループでも「ICVS Tokyo Clinic V2」を拠点として、幹細胞（多様な種類の細胞に分化する能力を持つ細胞）を中心とした治療を施術していますが、今年はそれら蓮見グループの再生医療を、一層進捗させてくれる強い味方が登場する予定です。２０２５年の年末頃に完成を予定している新しい〝細胞培養施設〟がそれです。

この最先端の細胞培養施設により、治療に要する培養細胞をより効率的かつ安全に供給できるようになるでしょう。再生医療のみならず、ＨＩＴＶ療法など蓮見グループが実施する治療全体を底上げしてくれる施設として、大いに期待したいところです。

復活・再生の年――。蓮見グループはみなさまの健康な毎日を実現させるため、不撓（ふとう）不屈（ふくつ）の精神で邁進したいと思っています。今年もご指導ご鞭撻（べんたつ）のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

CONTENTS

2 思いの言の葉 Vol.61
再生の年

3 The future of cancer treatment
新春特集 蓮見グループの“キーパーソン”が語る
がん治療の未来

11 連載コミック
第62回 ほのぼのJiJi・BaBa松＆梅

12 Special
北京で開催された「国際医療観光展示会」に蓮見グループがブースを出展
～ 大反響を呼んだ3日間 ～

14 〝元気〟で〝長生き〟する力を上げる！
ハスミワクチン&preHITV療法

Cover Illustration:Madoka Momota

The future of cancer treatment

HASUMI KENICHIRO

UEDA KOHEI

HASUMI JUN

新春特集
蓮見グループの“キーパーソン”が語る

SADAOKA SHUNICHI

がん治療の未来

2024年国立がん研究センターは、2011年に全国の拠点病院などでがんと診断された36万人余りのデータを分析。すべての年代の10年生存率は全体で53.5%――去年（2023年）の結果とほぼ同じであったと発表しました。標準治療のみでは今一歩超えられない生存率の壁――。免疫療法のエキスパートとして、蓮見グループはその壁をどう乗り超えていくのか。グループのキーパーソンにお話を伺いました。

ダイジェスト版

医療法人社団 珠光会
蓮見 賢一郎 理事長

医療技術を世界へ広げ、ひとりでも多くの患者さんを救命する

蓮見賢一郎先生が、樹状細胞を用いた臨床研究に着手してから40年の節目に当たる今年――蓮見グループの医療は、どのような方向に進もうとしているのか。蓮見先生に2025年の目標、抱負などをお伺いしました。

HITV療法を世界へ普及させる

――最初に、昨年の出来事からお聞きします。先生が特に記憶に残っているのは、どんなことでしょうか?

蓮見先生「まず、中国の海南島へHITV療法の技術移転が決まったことでしょうか。

海南島はベトナム付近に位置する常夏の島です。中国有数のリゾート地で、国家級医療特区に指定されています。詳細はまだ決まっていませんが、現在培養施設を建設中です。なるべく早期の診療開始を予定しています。

また大学関連では、エジプト・カイロ大学のグループと定期的な会議を開いています。同大学はピラミッドで有名なギーザに建つ国立総合大学です。特に乳腺の再発がんに対する治療工程を、過去の実績を紹介しながら、理解を深めて頂いています。治癒に至る治療工程を、過去の実績を紹介しながら、理解を深めて頂いています。周辺地区の政情が安定したら、一度訪問して、臨床試験を含めた具体的な方向性を明確にしたいと考えております。

また、以前にもお伝えしたブルガリアのプレヴェン医科大学への技術移転は、移転に伴う各種手続きなどに着手しています。順調に進めば、今年度中に具体的な方向性が見えるのではないでしょうか」

――蓮見先生はお元気ですね。ブルガリアやエジプトまではかなりの所要時間です。私は先生より若いですが、移動を考えると渡航には二の足を踏んでしまいます。

蓮見先生「〝HITV療法を普及させる〟という目標がありますから。これを実現させるためなら、多少の苦痛は我慢できます」

患者さんの健康を回復させるために最善を尽くす

――HITV療法の普及活動は、継続して行うことになると思いますが、その他に今年実現させたいことはありますか?

蓮見先生「今年大きなイベントとなるのが、〝骨髄から樹状細胞を誘導する〟システムの実働です。これは数年前から取り組んできたことですが、骨髄の造血幹細胞から樹状細胞を誘導しようという試みで、実現すれば、HITV療法の必須工程であるアフェレーシスに替わる方法として、臨床の場で活用できると思います。」

――アフェレーシスは、治療に必要な特定の血球や血漿を採取する治療工程ですね。患者さんは、3時間ほど動作を制限された状態を保たねばならないと聞きますが。

蓮見先生「DVDを観たり、音楽を聴いたりできますので、さほど辛さは感じないと思いますが、それでも3時間の拘束は、患者さんにとっては苦痛かもしれません。

骨髄から樹状細胞を誘導するシステムが整えば、処置時間が短縮され、痛みもありません。しかも、1回の処置である程度まとまった数の樹状細胞を誘導することができるのです。患者さんの負担を相当軽減させることができるはずです」

――採取時間の短縮は画期的ですね。

蓮見先生「治療のハードルをいかにして下げるかということは常に意識し、実践していかねばならない課題だと考えています。その答えの一端として、今年は、将来的にHITV療法を医療保険制度に適応させるための検討を始めたいと思っています」

――HITV療法の場合は、やがては保険医療を目指す医療技術、すなわち〝高度先進医療〟の範疇になると思いますが。

蓮見先生「高度先進医療制度にのっとり、その医療技術が将来的に任意保険制度に導入されることが適切かどうかを、臨床の現場で判断することになります。

HITV療法が高度先進医療に組み込まれることで、多くの医師や患者さんの理解が進み、新たな可能性が広がります。これにより、より多くの患者さんに臨床応用が可能となり、患者さんにとっての利益が増大することが期待されます。

HITV療法を高度先進医療に取り入れるのは簡単ではありませんが、長期的な展望を持ちながら、一歩ずつ前進させていきたいと考えています」

――免疫療法の治療レベルを向上させるだけでなく、患者さんのためになることは何でもやっていこうという姿勢の表れですね。

蓮見先生「亡父蓮見喜一郎が設立した珠光会は、1957年に法人化され、現在に至っています。37年前に私がその歩みを引き継ぎ、以来一貫して患者さんの健康と命を最優先に考え、全力を尽くしてまいりました。この揺るぎない信念を胸に、これからも患者さん一人ひとりの健康回復に全身全霊を注ぎつくすことが、私の使命であると信じております」

――蓮見先生の治療を待っている人は、世界中にたくさんいらっしゃいます。蓮見グループの益々の躍進をお祈りしています。

HASUMI免疫クリニック
植田 候平 院長

がんは〝罹(かか)らない〟、〝あきらめない〟が大事

『ハスミワクチン』をはじめ、『HITV療法』『preHITV療法』など、蓮見グループの主な免疫療法をすべて受診できる『HASUMI免疫クリニック』。それぞれの効果や使い方について、植田院長に伺いました。

標準治療の限界をカバーする『HITV療法』と『ハスミワクチン』

――HASUMI免疫クリニックには、多彩な免疫療法が揃っています。植田先生が考える、もっとも効果的な治療法は、どんなものでしょうか?

植田院長「がんの治癒、さらに再発予防まで視野に入れるなら、標準治療に免疫療法をプラスする方法がもっとも効果的だと思います」

――標準治療だけでは、心もとないということですか？

植田院長「進行度合いにもよりますが、がんには常に再発のリスクが伴います。これにどう対処するかということです。

免疫療法は体全体に作用する〝全身療法〟です。再発の元凶は血液中を漂う〝微細がん細胞〟ですが、これらの細胞にも効果を及ぼしますので、再発を防ぐにはうってつけではないでしょうか。

ステージ1から3までの患者さんであれば、標準治療に免疫療法を併用すれば、安心だと思います」

――ステージ4の患者さんは、どうしたらよいでしょうか？

植田院長「そのようなケースでも、決してあきらめないでください。

標準治療だけでは救命の難しい再発・進行がんの場合、まずは樹状細胞を用いる『HITV療法』が薦められます。

樹状細胞とは、がん細胞の情報を攻撃担当の免疫細胞に伝える、いわば免疫の要（かなめ）です。『HITV療法』では、独自の方法で、攻撃担当の免疫細胞（CTL＝キラーT細胞）を効率的に誘導し、がんを徹底的に叩くのです。標準治療で打つ手がないとされた症例でも、非常に高い有効性が示されています」

――『ハスミワクチン』は、どんな場合に有効なのでしょうか？

植田院長「ハスミワクチンは、本来がん予防に効果を発揮するワクチンです。ただ、樹状細胞を用いる免疫療法は、どうしても費用がかさみますので、ハスミワクチンを治療に用いるというのも、有効な方法のひとつだと思います。

ハスミワクチンは、がんワクチンの先駆けとして故蓮見喜一郎先生によって開発されました。80年近い歴史があり、確かな有効性と安全性が確認されているがんワクチンです。

実は、ハスミワクチンには、こんな症例がありました。その患者さんは肺腺がんで、標準治療では使える抗がん剤が尽きてしまいました。そこで、ハスミワクチンを始めたのです。最初は《New マリグナーゼ》※1というアジュバントを使っていましたが、《New スーパーマリグナーゼ》に変えたところ、なんと腫瘍マーカーが半分に下がったのです」

――アジュバントとは、免疫反応を増強するために用いられる「免疫賦活剤」ですね。

植田院長「ハスミワクチンに使われているアジュバントは、故蓮見喜一郎先生が長年の研究の末に開発に成功し、蓮見賢一郎先生により新たに改良が施された極めて質の高い薬剤です。腫瘍マーカーの下降を認めたときは、あらためて〝ハスミワクチンのアジュバントはすばらしい！〟と実感しました。これまでにも抗がん剤とハスミワクチンを併用されて〝効果がありました〟とおっしゃる患者さんは大勢いらっしゃいましたが、その方はハスミワクチン単独でしたから」

※1 New マリグナーゼ：アジュバントの種類。通常濃度のもの。New マリグナーゼの5倍の濃度を持つのが New スーパーマリグナーゼ

がんに負けることなく天寿を全うする！

――先ほど、ハスミワクチンの主要効果は、がん予防だとおっしゃいましたが、『preHITV療法』も同様の効能を有していますね。両者はどう使い分ければよいのでしょうか？

植田院長「『preHITV療法』とは、『HITV療法』で用いる樹状細胞を腫瘍内ではなく、動脈に投与する方法（14頁参照）。全身を巡って、非常に高いがん予防効果を発揮します。再発リスクの高い方、特にステージ3と診断された人には、標準治療後の再発予防として『preHITV療法』をお薦めしています。

もちろん、『preHITV療法』は健康な人にも高いがん予防効果をもたらしますが、予防のためには長く続けることが大切になります。費用を抑えながら長期的にがんを予防したいという場合は、『ハスミワクチン』をお使いになられるとよいと思います。

がんという難しい病気は、罹らないに越したことはありません。天寿を全うするためにも、健康なうちから予防策を講じることが大切といえるでしょう」

――まさに〝予防に勝る治療なし〟ということですね。本日はありがとうございました。

がん治療の主戦力として、蓮見グループの免疫療法を磨き上げる

ICVS東京クリニック
蓮見 淳 院長

昨年4月、ICVS東京クリニックの院長に就任された蓮見淳先生。今年の抱負などをお伺いしました。

学ばねばならないことは山ほどある

――蓮見淳先生（以下淳先生）は、昨年4月にICVS東京クリニックの院長に就任されました。どんな組織でも、〝トップ〟という場所からの眺めは特別だと思うのですが、何か感じていらっしゃることはありますか？

淳先生「今注力しているのが〝組織のマネージメント〟です。診療も研究も一介の医師として取り組んできましたので、組織を管理するという経験がありませんでした。幸いICVS東京クリニックには、事務長をはじめ優秀なスタッフが揃っていますので、日々勉強させていただきながら業務に取り組んでいます」

――具体的にどんなところが難しいですか？

淳先生「自分のなかのテーマは、良好な職場環境をどう編成していくかということです。結局、組織を動かすのは人ですから。私のようなルーキーが口幅（くちはば）ったいことを言うようですが、スタッフのみなさまが高い意欲を保てるような環境を構築できれば、自ずと組織の質も向上し、そこから産み出される仕事……医療やサービスも必然的に高い水準に達するのだと思います。

私ひとりの力ではでき得ることではありませんので、みなさまと協力しながら職場環境の向上に努めたいと思います。

――医療者という立場ではいかがですか。何か苦慮している点はありますか？

淳先生「医師としては、もっと勉強する時間を取りたいという思いはありますね。私はICVS東京クリニックへ入局する前は、東京慈恵会医科大学附属病院で標準治療に従事してきました。もちろん、父が免疫療法のスペシャリストだったので、同療法について馴染みはありましたが、本格的に勉強する機会はありませんでした。

幸い蓮見グループには優秀な研究者や設備が揃っていますので、多様な知見をもっと吸収したいと考えています。

また、免疫療法は標準療法など他の療法や薬剤とコラボレーションして効果を発揮する場合が少なくありません。効果的な治療戦略を立案するためには、免疫療法のみならず、がん治療全般にわたる幅広い知識が必要とされます。

がん治療は日進月歩――頻繁にアップデートされる情報にも敏感でいなければなりません。学ばなければならないことは山ほどありますが、ひとりでも多くの患者さんを救命するという目標を見失わず、一歩一歩着実に進みたいと考えています」

第4期の治療は複数の治療法を統合させた総力戦

――今年の注目ポイントとしては、どんなことが挙げられますか？

淳先生「もしかしたら、父がすでに述べているかもしれませんが、今年の蓮見グループのトピックは、〝骨髄幹細胞から樹状細胞を誘導する〟というシステムが稼働することですね」

――確かに蓮見賢一郎先生も言及されていらっしゃいました。骨髄幹細胞を用いることで、患者さんの負担になり得る〝アフェレーシス〟をしないで済むようになるということでしたが。

淳先生「その通りです。患者さんはアフェレーシスによる負担から解放されるわけですが、良いことはそれだけではありません。実は現在の方法だと、樹状細胞の誘導量が患者さんによってバラつきがあり、（誘導量が）少ない方はもう一度アフェレーシスを行わなければならない場合もありました。

骨髄幹細胞を用いた方法では、誘導量が格段に増えるので、（骨髄幹細胞の）摂取は1回で済みます。また、樹状細胞の抗原提示能[※2]も骨髄由来の方が高いとされているので、治療自体の性能も向上する可能性があることも朗報ですね」

――ICVS東京クリニックは、がんの第4期・進行がんの患者さんを救命することを目的に設立された、日本でも稀有な専門病院です。その責任者として、どのように患者さんと向き合うのか。意気込みのようなものがあったらお聞かせください。

淳先生「日本は保険診療ですので、医師は基本的にそのガイドライン内で医療を施します。しかし、そのガイドラインの内側だけでは、実施できる治療法に限界があるため、どうしても〝もうこれ以上は治療法がありません〟という宣告を受けてしまう患者さんが出てきてしまいます。

そうしたいわゆる〝がん難民〟と呼ばれるみなさまに、ガイドラインの外側には、まだ有効な治療法が少なからずあることを、まずお伝えしたいです。

がん治療、特に第4期の治療は、複数の治療法を統合させた総力戦といっても過言ではありません。その主戦力として、蓮見グループの免疫療法を益々磨き上げていきたいと思っています」

――淳先生がリードするICVS東京クリニックが、がん治療のフィールドにどのような変革をもたらすのか。楽しみにしております。本日はありがとうございました。

※2 抗原提示能：樹状細胞などが取り込んだ異物の一部を、抗原として細胞膜外へ提示する能力。この能力が高いと、攻撃担当の免疫細胞が的確に動きやすくなる

聖ケ丘病院
貞岡 俊一 院長
精度の高い検査で早期発見を目指す

地域密着型病院として、蓮見グループで唯一、保険診療を行う『聖ケ丘病院』。聖ケ丘病院ならではのがんとの向き合い方について、同院の貞岡院長にお話を伺いました。

医学の進歩に伴い、がん治療は多角的に進歩している

――聖ケ丘病院は地域密着型の一般病院として、不調を覚えて訪れた患者さんに〝最初の診断〟をくだす場所です。そうした、いわば〝最前線〟を率いるお立場として、がん治療の現状について、どんな考えをお持ちですか？

貞岡院長「あらゆる分野にいえることですが、がん治療もまた相乗的に進歩していると思います。それは内科的、外科的といった限定的な領域の話ではなく、iPS細胞などの再生医療や、分子標的薬などの進歩が著しい薬学など、多数のカテゴリーが絡み合い、互いに影響を及ぼし合いながら進歩を促し合っているということです。

たとえば、私が以前大学病院の放射線科で携わっていた治療法に、肝動脈化学塞栓療法（TACE = Transcatheter Arterial Chemo-Embolization）という技術があります。足の付け根の動脈からカテーテルという細いチューブを挿入し、肝動脈まで進め、塞栓剤と抗がん剤を流し込むのですが、このTACEも、どのような抗がん剤や塞栓剤を用いるのが効果的なのかなど、試行錯誤を重ねて進歩してきました。また、近年は、分子標的薬などの新しい薬を併用することで、より有効性を高められる可能性があることもわかってきました。

こうした事例が示すように、がん治療は新しい技術の開発に併せ、従来の治療法が周辺分野のテクノロジーを応用することにより、今後益々治療の間口を広げていくと思います」

精緻な検査・正確な診断は当院の生命線

――聖ケ丘病院の設立は1990年。30余年にわたり地域の医療に貢献してきた病院として、今後どのようにがんと向き合っていかれるのでしょうか？

貞岡院長「冒頭で触れたように、当院のような一般病院は、患者さんが最初に医療と出会う場所です。この場での処置が患者さんの予後に大きく影響しますので、治療の出発点となる〝検査・診断〟の正確性は、私たちにとっての生命線だと自覚しています。

がんの場合は、特に早期発見・早期治療が〝肝（きも）〟ですので、正確・適切に加え、迅速という要素も加わりますね。早期にがんを発見し、適切な治療を施し、必要に応じて素早く近隣の大病院などへ繋げる――。それが我々の重要なミッションです。

また、医師という立場に立ちかえれば、私は画像診断を専門としているので、（画像に）写し出された所見を正確に読み解く知識と技術を一層研鑽したいと思っています。そして、吸収した知識や技術を他の医師、スタッフと共有することで、医療全体のクオリティをさらに高めたいと考えています」

――聖ヶ丘病院は人間ドックも充実しているそうですが。

貞岡院長「がんはもちろん、生活習慣病などさまざまな疾病の早期発見に役立つ検査項目が用意されています。

人間ドックは体の異常を多角的に調べられるというメリットがあります。年齢やご自身のリスクなどを考慮し、定期的に受けていただければ安心ですね」

――今年の課題、抱負などについてお聞かせください。

貞岡院長「地域の人々に、聖ヶ丘病院のことをもっと知っていただきたいですね。

そのために必要なのは、まず私たち医療従事者やスタッフがコミュニケーション能力を高め、患者さんに温かく丁寧に対応すること。そして、待ち時間の短縮など、患者さんが快適に受診できる工夫を凝らすことだと思います。

当院は地域密着型ですので、もっともオーソドックスな情報伝達手段は〝口コミ〟です。医療水準はいうまでもなく、患者さんのアメニティを向上させることで、〝あの病院に行ってよかった〟と思ってもらえたなら、自ずと当院の衆望も高まるのではないかと考えています。

――地域の人たちにとっては、医療的な信頼に併せ、受診しやすい環境も重要な受診動機ですからね。

貞岡院長「もうひとつ注力したいのは、リハビリテーション医学の充実です。

リハビリは整形外科領域のみならず、脳卒中や心疾患、呼吸器疾患などさまざまな疾病の回復に効力を発揮します。

がんにも有用で、治療によるダメージからの回復力を高め、体の能力を維持・向上させる効果があるとされています」

――超高齢化社会を迎え、フレイル（加齢によって心身が老い衰えた状態）の増加も気になるところですね。

貞岡院長「身体を動かすことで症状や運動機能の回復を促す〝運動療法〟は、フレイルの改善、予防に効果的です。

厚生労働省の調査でも、運動などの身体活動が寝たきりや脂肪を減少させる効果があることが示されていますので、リハビリテーション医学を充実させることで、〝疾病や障害の治療を施す病院〟という基本に、〝健康を一層増進させる病院〟という新しい価値観を加えられたらうれしいですね」

――〝受診すれば元気になる病院〟ですね。地域密着型病院として、常に患者さんに寄り添い、一生を見守る。そんな貞岡院長のお気持ちが伝わりました。本日はありがとうございました。

HASUMI免疫クリニック
https://www.hasumi-cl.com

ICVS東京クリニック
https://www.icv-s.org

聖ヶ丘病院
https://www.hijirigaoka.or.jp

第62回
ほのぼのJiJi・BaBa 松&梅

小林 裕美子
マンガ家／イラストレーター
東京造形大学・デザイン学科卒業。イラストレーターとして、実用書や児童書、雑誌、WEB媒体、新聞等に挿絵やマンガを描いている。『美大デビュー』（ポプラ社）、『もち・ぽち』（徳間書店）、『親を、どうする?』（実業之日本社）、『私、産めるのかな?』（河出書房新社）、『親が倒れた！桜井さんちの場合』（新潮社）、『産まなくてもいいですか?』（幻冬舎）等、著書多数。

人気のお店

もう? まだ?

Special

北京で開催された「国際医療観光展示会」に蓮見グループがブースを出展 ～ 大反響を呼んだ3日間 ～

昨年11月21日から23日の3日間、中国・北京市の中国国際展示センター（朝陽館）で開催された『第22回北京国際医療観光展示会』に、蓮見グループが展示ブースを出展しました。大好評を博した3日間の模様を、同会に参加した日下康子先生（ICVS東京クリニック・副院長）に伺いました。

中国・北京市

引きも切らず人が訪れた〝蓮見グループのブース〟

珠光会と中国の橋渡し役となったのは、故蓮見喜一郎博士でした。博士が70年以上前に開発した「ハスミワクチン」の愛用者は中国でもたくさんいらっしゃり、それが縁で1998年、蓮見賢一郎先生が中国吉林省『吉林省腫瘍医院』と共同研究を開始。同年、同院の名誉院長に就任したのです。すでにがん治療のマイスターとして名を知られる存在だったこともあり、蓮見グループの展示ブースは、大人気だったといいます。

「今回の展示会は中国国内にとどまらず、アジア・オセアニア各国の医療機関、医療機器メーカーなどがブースを展開しました。私たちは〝HASUMI免疫クリニック〟〝ICVS東京クリニック〟〝ICVS Tokyo Clinic V2〟を連合させた〝蓮見グループ〟として出展しましたが、あまりの人気にびっくりしました」（日下先生）

会場となった中国国際展示センター（朝陽館）は、中国・国務院の認可を受けて建設された最初の国家級展示館。床面積は約6万平方メートル、毎年100以上のイベントを開催しているという、中国屈指の大パビリオンです。今回の『第22回北京国際医療観光展示会』には「再生医療」、不妊治療などの「生殖補助医療」、「免疫療法」など最先端医療をテーマにした100軒を超えるブースが立ち並んだといいます。

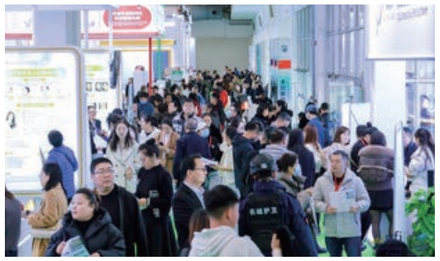
主催者から贈られた盾を掲げる日下先生

「出展者も、医療機関に限っていえば個人病院から大病院までさまざま。日本からも順天堂大学医学部附属順天堂医院や藤田医科大学病院などの有名どころがブースを出展していました。どのブースもそれなりに人を集めていましたが、私たちのブースは本当に来訪者が引きも切らずで、実際に数えたわけではありませんが、1日300人ぐらいは対応したのではないかと思います」（日下先生）

当日のスタッフは、日下先生を含めた日本側メンバーと現地のサポートメンバーを合わせて6名程度。それがフル稼働でも手が足りないほどの賑わいだったといいます。

「お昼を食べに行く時間もまともに取れませんでした。一般客だけでなく、各ブースの出展者や医療関係者もたくさん訪問してくれました

講演会で講師を務める日下先生。会場は満席の賑わいだった



会場風景

蓮見グループのブース。多くの来訪者であふれた

し、そのなかには日本の病院関係者も多くいらっしゃいました。彼らは、なぜ中国で蓮見グループの知名度がこれほど高いのか不思議がっていましたね」（日下先生）

珠光会が中国で活動を開始したのは、30年以上も前のこと――。歴史に裏打ちされた知名度は、まさに信頼の証（あかし）といえるのではないでしょうか。

珠光会の変遷は免疫療法の歴史そのもの

「展示会の会期中、会場に用意されたイベントスペースで講演会が催されました。各ブースを担う医師や医療関係者が講師となり、自分たちの特長や研究成果を発表したのですが、私たちのブースでは私が講師役を務め、蓮見グループの歴史を縦糸にしながら各治療法について解説しました」（日下先生）

珠光会の礎（いしずえ）であり、中国でも馴染み深いがんワクチン――ハスミワクチン。蓮見賢一郎先生が開発し、2008年に『ICVS東京クリニック』が開設したことにより世界的に普及が進んでいるHITV療法。さらに、preHITV療法などHITV療法の応用技術等々……。免疫療法の歴史そのものといっても過言ではない蓮見グループの変遷は、聴衆の共感と興味を呼び、大いに盛り上がったといいます。特にがんの第4期に効果を及ぼすHITV療法の反響は大きく、ブースにも多数の問い合わせが寄せられたそうです。

「一般の人はもちろん医師、医療従事者、医療機器メーカーの担当者……さまざまな方の訪問を受けましたが、なかには今実際に病気で苦しんでいる患者さんもいらっしゃり、ご自分の病状について具体的な質問を投げかけてこられました。医師として可能な限り対応しましたし、さらに詳細な説明を訊きたい場合は、ズームやメールでICVS東京クリニックの事前医療相談を受けられる旨を補足すると、安どの表情を浮かべる人もいらっしゃいました」（日下先生）

いちいち訪日する必要はなく、自国にいながら医師に相談できるとなれば、安心もいかばかりか。もちろん、正確な診断・治療を受けるためには、来日が必須であることはいうまでもありません。

「実は展示期間中反響の大きかったブースは、主催者側から表彰を受けたのですが、蓮見グループは見事にその栄誉に浴することができました。スタッフ一同てんてこ舞いした努力が報われ、とても嬉しいです」（日下先生）

主催者から来年の参加を懇願された蓮見グループ。次回はどんな進化を見せてくれるのか。楽しみに待っていてくれる人は、数多くいらっしゃるでしょう。

〝元気〟で〝長生き〟する力を UP 上げる！

ハスミワクチン & preHITV療法

日本人の２人に１人ががんに罹るといわれる時代。〝元気〟で〝長生き〟するためには、がんに負けない体内環境をつくること、すなわち免疫力をアップしておくことが必須といえるでしょう。免疫力アップにはさまざまな方法が謳われていますが、その１つが免疫療法です。がん治療においては、３大治療に次ぐ〝第４の治療法〟と呼ばれる免疫療法ですが、実は治療だけでなく、健康な人のがん予防や健康増進にも役立つことをご存知でしたか？ 今回はがん予防に特化した免疫療法、《ハスミワクチン》と《preHITV療法》について、『HASUMI免疫クリニック』統括部長の渋谷大介氏にお話を伺いました。

『HASUMI 免疫クリニック』
統括部長
渋谷 大介氏

preHITV療法
強力ながん抑制効果でがんの再発・発症を防ぐ

preHITV療法とは、患者さん自身の血液から採取・培養した〝樹状細胞〟を投与することで〝免疫システムを活性化〟し、その結果強化された免疫力によってがんを予防する、という免疫療法です。ステージⅣの進行・再発がんの治療に特化した次世代型免疫療法「ＨＩＴＶ療法」がベースになっているので、非常に強力ながん抑制効果が期待できます。

「ＨＩＴＶ療法には治療導入期に用いられるプログラムと、治療後のメンテナンス期に用いられるプログラムがありますが、preHITV療法はメンテナンス期のプログラムを、予防用にアレンジしたものです。

ＨＩＴＶ療法はステージⅣのがんに対して、高い奏効率（治療効果が表れた割合）を有しています。つまり、がんを抑制する力が強いということ。ならば、がんの発症予防にも、高い有効性が期待できる、という発想から開発されたのがpreHITV療法です（図1）」（渋谷氏）

ＨＩＴＶ療法の優れたがん抑制効果をもって、がんの再発や発症を強力に抑え込む――。しかも、preHITV療法は予防に絞り込んだ療法なので、がんを患った人はもちろん、健康な人にも広く用いることができます。これほど心強いがん予防法はないといってもよいでしょう。

「preHITV療法には、特筆すべきポイントがあります。樹状細胞の投与方法です。

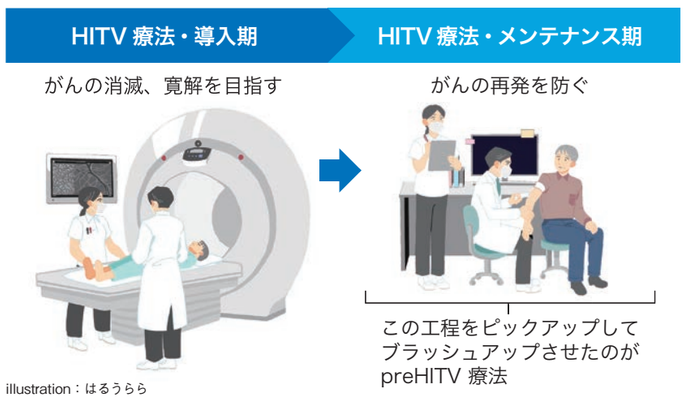
治療を目的とするＨＩＴＶ療法では、樹状細胞を腫瘍に直接注入します。対して予防が目的であるpreHITV療法では、樹状細胞を全身に行き渡らせる必要があるため、〝動脈〟に投与するのですが、実はこの動脈投与には、非常に高い技術が必要とされるのです」（渋谷氏）

一般的に動脈投与は、足の付け根や手首から細い管（カテーテル）を入れて薬を投与するのですが、preHITV療法では、ＣＴによるリアルタイム画像を確認しながら皮膚の上から針を刺し、動脈に直接樹状細胞を投与するのです。15分～30分程度で処置が終わるため、身体への負担が少ないことがメリットです。

「免疫療法を行なっている施設は多数ありますが、静脈投与による治療が一般的です。preHITV療法は、蓮見先生の長年の研究と経験に裏打ちされた技術があるからこそ成せる治療だといえるでしょう」（渋谷氏）

他の施設では技術的に困難な高度な手技で、がんを強力に抑え込む――。それがpreHITV療法の大きな特長といえるでしょう。

図１　preHITV 療法の仕組み



illustration：はるうらら

ハスミワクチン
80年近い歴史が物語るたしかな実績と安全性

ハスミワクチンは、免疫療法のレジェンドともいえる〝がんワクチン〟です。

ハスミワクチンが初めて臨床の場に用いられたのは１９４８年。以来、80年近くもの長きにわたり、国内外でがんの予防・治療に用いられています。

「がんを患ったけれど、何十年という単位でハスミワクチンを続けながら、元気に過ごされている方は大勢いらっしゃいます。ハスミワクチンがこれほど長く、途絶えることなく利用されている理由は、長年の実績に加え、安心・安全であることが多くの症例を通じて立証されているからでしょう」（渋谷氏）

ハスミワクチンが優れたワクチンであるもう1つの理由が〝アジュバント〟です。

アジュバントとは、薬の効果を高めるために用いられる薬剤や成分のこと。ワクチンでは免疫反応を増強する免疫賦活剤として用いられます。がんワクチンでは、アジュバントの性能や品質が効果を決めるといわれるほど重要な成分なのです。

「ハスミワクチンのアジュバントは、故蓮見喜一郎博士が長年の研究の末に開発し、蓮見賢一郎先生によりバージョンアップされた脂質を主剤に作られています。

アジュバントは薬効を高めるほか、アジュバント単独投与でも、がん予防や健康維持・増進に効果が期待できると思います」（渋谷氏）

さまざまなタイプが用意されている《アジュバント療法》

ハスミワクチンから派生した療法に、アジュバントを単体で用いる〝アジュバント療法〟があります。

「ハスミワクチンのアジュバントは、非常に高い免疫活性能力が認められており、がんに対してはもちろん、風邪やインフルエンザなどの感染症予防や、免疫が関わる病気、たとえば慢性関節リウマチや喘息、アトピー性皮膚炎やアレルギー性鼻炎、膠原病などにも広く効果が期待できると思います」（渋谷氏）

さらに、嬉しいことにアジュバント療法には、目的に応じて使いやすさを追求した多様なアイテムが用意されているのです。

「まず皮下注射。カートリッジ型のアジュバントを週に1回、自己注射で皮下投与するのですが、皮下の樹状細胞を常に活性化することで、がんをはじめとするさまざまな病気を予防する効果が期待できます。

皮下注射とほぼ同様の効果が期待できるのがパッチタイプ（貼り薬）の《Mアジュバント》です。週1回皮膚に貼るだけなので、注射には抵抗があるという方などにも使いやすいと思います。

そのほかにもドリンクタイプの《コルダ》や、点鼻薬スプレーがあります。

コルダは健康ドリンクとして1日1本飲むという方や、のどが痛いときに飲むといった方など、さまざまな使われ方をしています。花粉症などのアレルギー性鼻炎には、点鼻薬スプレーが効果を発揮します」（渋谷氏）

preHITV療法＋ハスミワクチン

自分に合ったメニューを選んで〝継続する〟ことが大事

preHITV療法とハスミワクチン、そして、アジュバント療法――。それぞれにメリットがありますが、各療法の選び方について、渋谷氏に伺いました。

「がん予防に限定すれば、最も効果的なのはpreHITV療法です。ただ、樹状細胞を用いる療法はどうしてもコストがかかってしまいます。費用を抑えながらがんを予防したい、健康を維持したいという方には、ハスミワクチンやアジュバント療法をおすすめします。

がん予防も健康アップも、1回の治療で一生をカバーできるものではありません。通院が難しい場合は自宅で投与できる方法を選ぶなど、ご自身の生活スタイルに応じて、長く継続できるメニューを選ぶことが大事だと思います」（渋谷氏）

さらに、渋谷氏は日常生活の心得について、次のように提言しました。

「免疫力をアップさせるために不可欠なのは、健康的な日常生活です。バランスのよい食事、適度な運動、ストレスフリーな生活を心がけ、そこにハスミワクチンやpreHITV療法をプラスしていただくことで、より病気になりにくい体内環境がつくられるはずです」（渋谷氏）

『HASUMI免疫クリニック』では、ハスミワクチンやpreHITV療法についてのお問い合わせ・ご相談を受け付けています。健康状態や生活スタイルなどに合わせたメニューを患者さんと一緒に考えてくれるので、健康に不安のある方はもちろん、もっと健康をアップさせ、〝元気〟に〝長生き〟を目指したいと思っている方も、一度『HASUMI免疫クリニック』に相談してみてはいかがでしょうか。きっとためになるアドバイスをもらえるはずです。

さまざまなタイプがあるアジュバント療法

HASUMI免疫クリニック

TEL：03-3239-8101

診察時間：9:00～12:00　13:00～17:00（土・日・祝日休診）